

～新渡戸記念の～

## 『言葉の院外処方箋』

新渡戸稲造記念センター 長 樋野興夫

### 第5回「人生の目的は【品性を完成するに在り】」

コロナショックの日々である。そんな中、『がん治療情報』（Vol 4 2020年）が送られてきた（下記）。私の読書遍歴は、「内村鑑三・新渡戸稲造・南原繁・矢内原忠雄」である。内村鑑三(1861-1930)は「成功の秘訣」10箇条の中で、人生の目的は「品性を完成するに在り」と言っている。

内村鑑三は、また、誰もが後世に残すことができる最大の遺物は「勇ましい高尚な生涯」であるとも述べている。「人生は短し、真理は長し」（内村鑑三）の言葉が、現代社会に生きる「叡智」として身にしみる今日、この頃である。

「古いものには、まだ再活用される要素があるのである」（内村鑑三）の教訓が今に生きる。「ビジョン」は人知・思いを超えて進展することを痛感する日々である。「自分の命より大切なものがある」は、「役割意識 & 使命感」の自覚へと導く。「がん哲学外来」の基本理念は、「苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生む」である。「愛は近きより(Charity begins at home)」である。まさに、「良きサマリア人のたとえ」（ルカの福音書10章25～37節）でもある。

## 人生の目的は 品性を完成するにあり

つらい治療を終え、やっと職場復帰してみたら、責任あるポストを回復に努めていた。会社に属切られた思いだとおっしゃる患者さんがいました。その方に私はこの言葉を伝えました。品性とは、人格であり人としての品位です。世間の評価や仕事での昇進などに関係なく、目の前のことに懸命

に取り組み、それによって人が喜んでくれることで品性は磨かれていきます。後日この患者さんは、会社の

上司に自分が休んでいた関係書をフォロワーしてくれたことへの感謝を伝え、同僚を補佐することを申し出たそうです。

困難が狭いかかったとき、品性の完成に向けて謙虚に生き続ける姿勢こそ美しいし、そこに希望が生まれると私は思います。

### 樋野興夫

1946年、愛知県生まれ。東京聖光大学助教授、新進中経団連常任センター長、東京博士、東京コメディカル・インスティテュート、がん研究開発国際研究所を経て東京聖光大学健康科学部・看護学教授に。2006年、「がん」をテーマに、東北大学大学院の先端生命科学専攻に2007年、朝日がん大賞受賞(2008年)、がん研究センターがん研会賞(2009年)、「がん」をテーマにした書籍多数。

